



座談会にて発言する国内開教使 大和田聖二上人

研 修 日 程

開催日 平成30年3月13日(火)開催

テーマ

「寺院僧侶が目を向けるべきところとは…」

- 9:30 開会式
- 9:40 研修Ⅰ 講義「葬式仏教のあるべき姿」  
講師：薄井 秀夫 先生  
(株式会社寺院デザイン代表取締役)
- 12:40 研修Ⅱ 講義「最近の法務事情について」  
～墓じまいとペット供養～  
講師：中野 孝昭 先生  
(一級法務士 東京教区公春院副住職)
- 15:00 研修Ⅲ 座談会「国内開教使の取組みと課題」  
(意見交換・質疑)
- 16:20 閉会式

# 平成29年度 国内開教使 研修会報告

平成29年度国内開教使研修会  
は平成30年3月13日に記載の日程で開催いたしました。  
平成29年度は「寺院僧侶が目を向けるべきところとは…」をテーマに掲げ、丸一日の日程で研修を行いました。現役の国内開教使や元国内開教使など、合計17名がこの研修会に参加し、日々の活動の糧とするべく研鑽を積みました。

講義「葬式仏教のあるべき姿」  
講師 薄井 秀夫 先生

国内開教使は、一般ご寺院の檀信徒のような今までお付き合ひのある方ではなく、初めてご縁をいただいた方に法を施す使命があります。葬儀社、霊園、石材店など業者の方々から寄せられる「葬儀」や「法事」がご縁のきっかけとなることが多いのが事実です。

一方、「葬式仏教」と揶揄されて久しい我々僧侶を取り巻く環境が厳しくなっているのも現実です。しかしながら、本当に「葬式仏教」は悪いのか? 「葬式はいらぬ」、「葬式はやらない」などの「葬式離れ」は、その内容、あるいは我々僧侶の心構えに問題があるのかもしれない。

研修Ⅰでは「葬式仏教のあるべき姿」と題して薄井秀夫先生にご講義をいただきました。

講義の中で薄井先生は「葬式仏教」と揶揄されて久しい現代の仏教ではありますが、その「葬式仏教」について非常に前向きなとらえ方をされています。



研修Ⅰ 薄井秀夫先生の講義の様子



座談会にて発言する国内開教使 堤忠春上人

した。

直葬の増加や、墓じまいなどの現在取り沙汰されている問題は、社会が変化したことでこれまで当たり前だった仏教の在り方と「ズレ」が生じてしまったこと、の表れであって、現代社会の日本人の信仰心が無くなり表面化した問題ではないのだとお話しされていました。

一方で現代の葬儀は僧侶が行うものであるという意識が強すぎ、参列者傍観者になりがちであり、現在の葬儀に足りないのは「説明」と「参加」であるとのことでした。

こうした、まさに我々僧侶が直面している諸問題について、檀信徒の視点に立った講義をしていただき、研修に参加の皆様も真剣な表情で聞き入っていました。

講義「最近の法務事情について  
「墓じまいとペット供養」  
講師 中野 孝昭 先生

薄井先生の講義でも取り上げられていたように昨今、墓じまいの話がよく聞かれます。

例えば地方寺院では、離れて住む後継者が、身近にお墓を求め直すことから、「お墓をお返しします」というようなことがあり、都市部でも、子供がいないのでお骨を合祀墓に移したい、そのような話も聞き及びます。お施主様の事情は多様化しており、墓じまいもよほどの事情なのだと思います。

また現代では、ペットは家族の一員として可愛がっている方もおられます。「ペットロス」という言葉もあるくらい、愛するペットに先立たれる悲しみは計り知れないものがあります。亡くなったペットを懇ろに弔ってあげることができたら、どんなにお施主様の心が安らぐことでしょうか。

研修Ⅱでは、最近の法務として、「墓じまい」と「ペット供養(特に葬儀(告別式)と追善供養)」を取り上げ、一級法務教師である中野孝昭先生をお招きして、法要の教義的な根拠、差定、表白、実際に厳修する際の注意点などご講義していただきました。

「墓じまい」や「ペット供養」

を依頼された際に、お施主様の心に寄り添いつつ、法務を厳修できるようにするための貴重な学びの時間となりました。

座談会  
「国内開教使の取組みと課題」

研修の最後に、研修会への参加者全員で輪を作り座談会を行いました。当時現役の国内開教使を中心として、元国内開教使や国内開教委員、宗務庁の国内開教担当職員も交わり、参加者全員で様々な意見の交換が行われました。当時1期目の国内開教使であった堤忠春上人(茨城教区清浄院)と大和田聖二上人(三州教区聖蓮寺)のお二人にとって、先達のご意見は実のある話であったと思います。

国内開教使の皆様にとって、また今後の国内開教事業全体にとって、非常に価値ある研修会となりました。